《演習2—①》

——《解答と解説》——

L3F／夏期／＊2

出典…島原泰雄『花月双紙』／早稲田大学　法学部・97年

文章略解……『花月双紙』は松平定信の隠居後に書かれ、文政年間に私家版として刊行されたものと推測されている。全部で一五六項目からなるが、種々雑多な題材が書き連ねられ、全体の統一はない。基本的には理知の人である定信であるが、『花月双紙』には理知の大切さを説く部分は少なく、人の世の変化にしたたかに対処する現実主義者としての作者像が浮かび上がってくる。その底を貫くのは、自然は人の世を映す、という天人一致の思想である。

現代語訳……

〔さくらてふ……〕

桜という花は我が国のものであるのに、中国にもある（かもしれない）と思って、様々な例などを引いて調べてみたけれども、桜を描いてある中国の絵もなく、（桜を）表現していると思う（ような）漢詩もないので、（桜という花は中国には）ないというのが適当だろう。さて、（我が国では）桜だと（わざわざ）言わなくても、（ただ）花と言いさえすれば、ほかの木とは取り違えることもないものであって、ほのかにあけて行く山際に、（桜が）雲か雪かとばかりに咲き満ちている（と言うの）も、霞が立ちこめている（春の）夕暮れ時に、花の様子も霞んで見えて、その（桜の咲いている）ところだけが、（白く浮き上がって）暮れ残っている景色（である）などと言うのは（まだまだ）浅はかである。まして、（この桜という花は）萼がのびのびとしていて大きいので、近くで見ると見劣りがするというのは、例の（よくありがちな）、趣向を変えて、物知りであると気負っている気持ちにはまりこんでいるものであるよ。（桜は）風に散り乱れても、雨に濡れそぼっても、遠くの山に見えても、軒端（近く）に（ある木に）向かいあってながめるのも、明け方でも、夕暮れ時でも、露が乾く（ほどの短い）間も目が離れるときが全くない〔＝ほんのちょっとも目が離せない〕が、特に、日本的な姿〔＝咲き方〕で、枝ぶりも素直で、花の形もゆったりしていて、匂いまでもしつこくない（というの）も、（なんとよく日本の心を表しているものかと）不思議なほどに感じるものである。それなのに（桜は）どこにでもあると言うのはもちろんのこと、曙や、夕

暮れなどと趣深くなるように言葉を添えるというのは、まだ、（桜に対して）深く愛着に染まった心ではないのだなあ。何もかも言葉によって言い尽くそうと思うのは、たいそう浅はかな心であるよ。

〔夏は麻の衣……〕

夏には麻の衣服を着るのが適当である、冬には綿を入れた衣類を重ねるのが適当である、というのは（たしかに）理窟の通ったことである。しかしながら、（夏だというのに冷え込んで）雹が降るときは、夏でも綿を入れた衣類を着ることがあってもよい。冬でも暖冬であるときは、単衣（ひとえ）ものや（綿入れではない普通の）袷（あわせ）もの（の衣類）をも着るのがよい。それなのに理窟のようにするならば、あるいは病気を得るにちがいない。今の世で、ただ理窟だけを言って、国を治め、人民を治めようとしている人は、このようなことがあるかもしれない。

（普遍的な）道理がないというのが道理の本質である。（いつでも物事が）道理のとおりに行われるものならば、何の難しいこともないだろうに、そうとも知らないで、他人と争い、政治を批判したりして得意になっている者は、（この、普遍的な道理はないという）道理の本質を知らないというものであろう。

〔ただうどは……〕

普通の人は、漁船というと、（みな）同じように造るものであると思うのも無理はないが、こ（の船というもの）はそのように（同じように）造っても、自然によく（全体の性能が）整って出来上がる（船）もある。（あるいは）ある部分はよくても別の部分がよくない（船）もある。ちょっと見にはいかにもよい（船）で、乗ってみるとそうでもない（船）もあって、ひとつも同じものはないものだ。波や風を良くしのぐ（船である）と思っていると、（その船は）進むのが遅いということもある。（逆に）船足が早いものは（風や波に）弱いということもある。どれをとっても、少しの癖もないということはないものなのだ。（実際に）乗って試してみて、そ（の各々の漁船の癖）をはっきりと知ることができて初めて（その後に）、（海原）遠くへ乗り出すのがよいのである。

昔ある人が、（他のある）人を見て、「何ともいい人である。ほんの少しも悪いところはない」と思うならば、まずは考え直して、聖人は別として、（一般には）賢い人だとは言っても、どこにもすみずみまで欠点がなくて良い人というのはいないものなのに、そのように（どこにも欠点がないと）見えるのは自分の人を見る目がまちがっている（からな）のである。まずその人のよくないいくつかのところを、十分にわきまえてから、（その人を）任用しなさい。

〔ある翁に……〕

ある老人に、「あの人はどういう人なのか」と尋ねると、「たいそうよい人だ」と答える。「（別の）彼は（どういう人なのか）」と言うと、（また）「よい人だ」と答える。きっとあの人は悪い（人だ）というような（人）を、（わざわざ）選んで尋ねてみると、（その老人は、やはり）「よい人だ」と答える。「どういうことなのか」と（その老人に）尋ねたら、（その老人は）「人を見るに（あたって）は、まず十のうちに五つほどもよいことがあるのは、たいそうよい人だと判断するのがよい。十のうちにひとつふたつでもよいことがあるのは、よい人である。十のうちにみな悪い（人のこと）をば、悪い（人だ）と心得なさい」と言ったそうな。

〔こは人を……〕

これは、他人（のことを）このように（広い心で）見るということなのである。自分を見る（ため）の方法ではない。

〔よきもあしきも……〕

（人間の）善し悪しにも、軽い重いの違いほどのことはあるのだろう。

〔雨かぜの……〕

（漢籍に）雨や風は時節に外れない〔＝いつでも同じように起こる〕と言うのも、甘露がおりるというのも、必ずしも虚言であるとばかりは言えまい。政治が緩みすぎ（て、寛大な方向に行きすぎ）れば、暑さや寒さもけじめがいい加減になり、政治が流れ（てなんとなく安易に行われるようにな）れば、季節の移り変わりも正しくなくなるなどと（も、漢籍に）言う。天も人も同じ道理なので、そうでもあろうよ。

《解答》

問1 イ　**問2** 2＝イ　3＝ハ　4＝ホ　**問3** A＝ヘ　B＝イ

問4 5＝イ　8＝ハ　9＝ハ　**問5** からくににもあり〔8字〕（3行目）

問6 ニ　**問7** ハ　**問8** ニ　**問9** ロ

問10 イ　**問11** 11　**問12** ホ

《解説》

問1 この傍線部分を含む部分の冒頭に「さくらてふ花は」とあり、それが日本以外の「からくに」にあるか否かを検討していって、この「なしとこそいふべけれ」という結論づけで文が終わっていることを捉える。この流れで解釈すれば、ここの「なし」の主語は「さくら」と取るのが妥当であろう。イ以外のものは、いずれもこの傍線部分の前に置くと余分な意味が付け加わってしまう。ここは単純に主語そのものを示すイをあてはめておく。

なお、この「なし」は形容詞で、存在の否定になっている。ロ・ニなどなら、「なし」ではなく「ならず（にあらず）」で属性の否定とすべき内容なので、文法的な観点からも排除できる。

問2 同音異義の識別に関わる問題である。それぞれの傍線部分の意味を、前後関係から判断していくことから解答が選べる。

2に関しては、直後の「……にはまぎれぬ」というところから考えたい。「まぎれぬ」とは「紛れない・混同しない」ということ。ここでは「花」とだけ言えばもう「桜」であると決まっていて、他の樹木とは混同しない……という主旨である。したがってここの「こと木」とは「異木」。

3に関しては、桜の花について「近劣りするなど言ふ」という発言について筆者が分析している文脈であることから考えたい。この発言については、「ことかへて」、つまり趣向を変えることで新奇さを狙っただけのテクニカルなものだと筆者は断じている。このような話の流れに照らせば、「才オふ」は「才負ふ」つまりは「自分の才能を自負する」ことから、さらにここでは「自分の才能を鼻にかける」という意味に解するのが適切だと判断できる。

4については、直前の「風に散りかふも……」以下で、ありとあらゆる場面において桜が美しいという、その美しさを褒めた文脈であることを押さえたい。様々な場面においてそれぞれの美しさがあると言うのだから、「目が離せない」という肯定的な意味に取るのが妥当。「離る」という動詞を知っていればホを選ぶのは容易だろう。この「離る」は、「枯る」との掛詞に使われやすいという点でも、重要古語である。

問3 それぞれの接続語の機能をまずは確認しておこう。イは「それなのに」の意味。前を受けて逆接的に後の叙述を導く。ロは現代語で言う「もしくは」。選択を示す。ハは「さ・あれ・ば」の縮まった形。「そうなので」という順接確定条件を示す。ニは現代語と同じく、前で述べた内容に注釈をつける文脈で用いられる。ホは「さ・あら・ば」の縮まった形で、「そうならば」という順接仮定条件を示す。ヘは現代語と同じく、前で述べた内容よりも、さらに程度の甚だしいものを後につづける文脈で用いる。

Aについては、この空欄の前の内容も、後の内容も、いずれも「花（＝桜）」についての否定的な言辞を筆者が批判している文脈であることを押さえればいい。「ほのぼのとあけゆく……暮れ残す景色など言ふ」（5～7行目）を「浅かりけり」と断じた後に、「萼ののびやかなれば、近劣りするなど言ふ」（7行目）を「才負ふ心なりかし」と批判しているのである。同種のもので程度の差があるものをつなぐ際の接続詞としては、へが最適であろう。

Bについては、前の文の「されど、伏陰あるをりは……」以下で、「ことわり」（17行目）に反してもいい場合について述べており、その後で「ことわりのごとく……」となっていることを読みとれれば、逆接の接続詞を入れるのが適切であろうと推測できる。選択肢群の中で逆接的に使えるのはイしかない。

問4 **5**の「こちたし」（事甚し・言甚し）は①「人の口がうるさい」・②「おおげさである・仰々しい」・③「量が多い」などの意味を持つ形容詞。ここでは「（桜の花の）匂い」が主語になっていることから、②の意味に解釈するのが適切だとわかる。この選択肢群の中で選ぶと

すればイ。ロ・ハ・ホのように、選択肢に否定のニュアンスを含んでいないものは、傍線部分の末尾の助動詞「ぬ」（打ち消し「ず」の連体形）に照らしても不適切。ニでは前述の辞書義から外れる。

8の「ただうど」（只人）とは、「ただの人」つまりは「凡人」のこと。この意味にジャスト・フィットした選択肢はハ。ニの「小人」は「つまらない人・取るに足りない人」の意味で、ハに意味的には近いが、否定的なニュアンスが加わるのでやや外れる。ロはニの逆で「人格の立派な人」のこと。これでは「ただの人」の意味からさらに大きく外れてくる。イやホでは、こうした辞書的な意味に全くあてはまらない。

9の意味を取っていくには、「こ」と「さ」がいずれも指示語であることをまずは押さえるべき。ニのように「こ」を指示語として捉えていないものはこの点でまず外れる。残るイ・ロ・ハ・ホの選択肢の絞り込みは、「さ」の指示内容による。ここでは傍線部分の直前に「おなじやうにつくるものと……」とあることから、この「さ」の指示内容は「同じように」であることがわかる。というわけで正解はハ。

問5 傍線部分の「いづこにもあり」の主語は、この文の中には明示されていないが、この引用部分（第一話）の全体が「桜」について述べたものであることから、ここでも「桜（の花）」を主語として解釈していけばいいと推測できよう。この文章の中では、「さくらてふ花は、わが国のものなる」（3行目）と、冒頭から「日本独自のものとしての桜」という観点から桜が論じられている（このことは、引用部分の後の13～16行目の記述からもわかる）。だとすれば、ここで「桜の花」が「いづこにもあり」＝「どこにでもある」ということは、「日本以外のところにもある」ということ。引用された「第一話」の中で「日本以外のところ」に言及されたのは「からくに」（3行目）・「もろこし」（4行目）のみ。そこから「あり」という動詞を含んでいる部分を字数制限に合わせて抜き出せばいい。

問6 **問3**のAで検討したとおり、「ほのぼのとあけゆく……景色など言ふ」「萼ののびやか……近劣りするなど言ふ」（5～7行目）はいずれもここで筆者が批判している桜の観賞態度である。したがってイ・ロ・ハは外れる。ニについては、**問4**の**5**のところで検討したとおり、「こちたからぬ」は「わざとらしくない」という肯定的なあり方を意味している。したがってこれが正解。ホについては、10行目（傍線部分**6**）を受けたものであるが、これについては、続く文中で最終的には「……いとあさき心かな」（12行目）と断じられている。したがってこれも正解としては選びにくい。

いずれにしても、問題文中の逆接の語に注意して、どこからどこまでが筆者自身の述べる「望ましいあり方」で、どこからどこまでが批

判の対象なのかを見定めていくことがカギになる。ここでは「……まぎれぬものを」（5行目）の「を」が逆接の接続助詞であることと、傍線部分6の直前の「さるを」（10行目）の「を」も同様に逆接の接続助詞であることを踏まえていくことがポイントであろう。

問7 傍線部分の「かかること」の指示内容は前の文の内容だと考えるのがまずは自然であろう。前の文は「ことわりのごとくせば、またやまひもうべし」、つまり「道理のとおりにやっていると、よくないことが起こるだろう」という意味である。これに相当する内容を前半・後半ともに持っている選択肢はハ。イの「現実を受け容れる」・ロの「失敗を恐れない」・ホの「正論に至る」ではいずれも前向きな内容で、「やまひ」にならない。ニの「矛盾を感じる」は「やまひ」のニュアンスに近いが、これだと前半部分が「論理ばかりを信ずることに」となっており、「ことわりのごとくせば」という過程のニュアンスにそぐわない。

問8 現代文部分との対応関係で検討していくのがここでは得策だろう。この「［C］なきがことわりのまことなり」に相当する現代文部分は「現実は固定されたものではなく、物事は常に多面性を有しており、その現実を直視せよ」（25～26行目）の部分。だとすれば、この空欄に入れるべきは「固定されたもの」としての「現実」ということになろう。そこまで押さえた上で選択肢を見ていくと、「不変の現実」に相当する内容を持っているものはニ・ホの二つだとわかる。イの「かたき」は、直後の「何のかたきこともあらじ」で用いられていることに照らせば、「固き」や「堅き」ではなくて「難き」の意味に解するのが妥当であり、「不変の現実」にはならない。ロ・ハでは意味的に反対である。残るニ・ホの選択に際しては「まことなきがことわりのまことなり」「ことわりなきがことわりのまことなり」の二つの文のニュアンスを比べてみるといい。「ことわりのまこと」という言い方から解釈するなら、「まこと」は「本質」という抽象的なもの、「ことわり」は世の中の具体的な物事の道理、の意味に取れよう。ここではニの方がホよりはベター。

問9 この空欄を含む文が、前の文と対比的な内容を持っていることから推測していけばいい。空欄の前では「波風しのぐ」つまり外圧に対して強いと、「行くこと鈍き」つまりは漁船の速度が遅いということが述べられている。対して、空欄を含む文では「行くこと［D］」だと「弱きもあり」とされており、いずれにしても強さと速さが両立しないことが述べられていると読みとれよう。だとすればこの空欄に入れるべきは「鈍き」（＝ハ）の反対で「進むのが速い」の意味になるべきロ、ということになる。

問10 傍線部分の「さ」は直接的には前文の「いづこもくまなくよき人」を指す。そういう人は本当はいないはずなのに、「いづこもくまなくよき人」に見えてしまうのは……という文脈である。そのように読みとれば、ロやニのように、人間について欠点と美点とを個別に見据えていく様子はこの傍線部分とは相容れない。また、このように個別に見据えていく様子はハの選択肢の内容につながる。これは「うちみてはいかにもよきが、のりてみればたがふ」（28～29行目）というように、欠点と美点とをそれぞれ持ち合わせている様子を言い表したものである。ここまで読みとってくると、このハの内容と相反するイが正解だとわかる。ホはイと相反するものではないが、ロ・ハ・ニのような個別具体的な美点・欠点を「明らかに知りえ」ること、というのだから、傍線部分の内容にはそぐわない。

問11 「文法的に種類の異なったもの」という設問の指示は、これ自体では様々に受け取れようが、傍線の付された語と照らし合わせていけば、いわゆる「仲間外れ」を探すことは比較的容易であろう。

ここで、傍線の付された五つの語はいずれも動詞である。活用形は11・13・14が連用形（直後に動詞、もしくは連用形接続の《過去》の助動詞「き」がある）、12が終止形（そこで文が終わっていて、係り結びしていないし、主語に格助詞「の」がついてもいない）、15が未然形（直後に《打消》の助動詞がある）となっており、活用の種類は三種類なので、これでは「種類の異なったものをひとつ」抜き出すことはできない。

では、活用の種類を見るとどうか。11はワ行上一段（ゐ・ゐ・ゐる・ゐる・ゐれ・ゐよ）、12と15はハ行下二段（へ・へ・ふ・ふる・ふれ・へよ）、13はナ行下二段（ね・ね・ぬ・ぬる・ぬれ・ねよ）、14はア行下二段（え・え・う・うる・うれ・えよ）となっている。つまり、11以外はすべて下二段の活用になっている。

なお、活用語について「文法的に種類が異なる」というとき、前述のとおり様々なことが同じ表現で出題できるわけだが、実際には聞かれることは一定の範囲内にある。まず、用言（動詞・形容詞・形容動詞）・助動詞を通じて聞かれることがあるのは《活用形》や《活用の種類》である。動詞に独特なものとしては《自動詞・他動詞の区別》や《敬語の種類》が問題となる。また助動詞の場合は、《接続》・《文法的機能（いわゆる「意味」）》などに注意することになる。

問12 直前に引用された「第一五二話」の内容から、この中で「人の世」と対比・並列されているものを探していけばいい。この引用部分では「人の世」に相当する表現は、具体的には「政」しかない。この「政」と対比されているのは、「雨かぜ」「甘露くだる」「あつさもさむさも」「季候のうつる」など。これらを包括する概念となる語を選んでいくと、選択肢の中ではホのみ。イ・ロ・ハのように、人間の行為に関するものではない。ニの「現実」では、自然も人間もどちらも含まれてしまう。

《演習2―②》

――《解答と解説》――

L3F／夏期／＊2

出典…尾形仂『松尾芭蕉』／明治大学　経営学部・00年

文章略解……「海暮れて鴨の声ほのかに白し」の季語は「鴨」である。この鳥には古来、多くの歌人が望郷・旅愁などを託して歌ってきた。漂泊の俳人・芭蕉も、この句に望郷の念を籠めたのであろう。その「鴨の声」を「白し」と言いとった「白」は、透き通る色としてのそれであり、ここでは岩肌の冷徹さと対比されている。その透明な声の余韻の向こうに、漂泊の思いが噛みしめられている。一気に読み下した感じは、漢文訓読調の破調にも通じている。

《解答》

問1　①＝4　③＝1

問2　3

問3　2

問4　切れ字（3字）

問5　4

問6　4

《解説》

問1 ① 「～なむ」の形をとる表現としては、(1)未然形接続で《誂えの終助詞》、(2)連用形接続で《複合助動詞「な」＋「む」》、(3)「死なむ・去なむ」の形で《ナ変動詞未然形活用語尾＋助動詞「む」》、(4)上記以外《係助詞》の四種を識別する。ここで傍線部を品詞分解すると、「雲隠り」は連用形だから、「雲隠り（動詞）＋な（助動詞）＋む（助動詞）」となる。この「な」は《確述》の助動詞である（《完了》の助動詞と同じものだが、直後に《未実現》を示す「む」が接続するから《確述》のほうがよい、ただし《強意》も可）。また「む」は選択肢すべてが「だろう」と訳していることから《推量》でよかろう。したがって傍線部の「なむ」は《確述＋推量》で訳出されていることが望ましい。このことから、選択肢の中で唯一《現在推量》「～ているだろう」の訳語を用いてしまった選択肢2は他と比べて妥当性が低いので、ここで排除できる。

残る三つの選択肢を吟味するには、傍線部に対する主語を和歌の中で考えてゆくのが早い。問題文で傍線部を含む段落全体の話題は「鴨」だが、歌の中では「鴨を（見て）雲隠りなむ」と言っており、「鴨」は主語ではない。とすれば「雲隠り」の「雲」は「鴨」との縁語に過ぎず、実際に天空の雲を意味するのではないことになる。これは、忌み言葉である「死ぬ」を避けて「雲隠る」と言ったものと判断できる。よって、「鴨」を主語とすべき選択肢1や、主語が「鴨」でも「人（我）」でもよい選択肢3よりも、「死」を明示している選択肢4の妥当性が高い。

③ 筆者は傍線部の次の行に、「鴨」にまつわる伝統的な詩的イメージとして「望郷・旅愁・不安・寒さ」を挙げている。これらのうち傍線部にもっとも関連が強いものとしては、傍線部直前の「世に経れば～やすからず」に鑑みれば「不安」が選べる。よって各選択肢末尾の心情語に注目して、選択肢1「辛い」・選択肢4「苦しい」を残す。次に、傍線部中の「下の思ひ」に注目する。これは同じ歌の中の譬喩表現「鴨の水掻き」すなわち「水面上の鴨は一見なんの苦労もなさそうになめらかに滑ってゆくが、目に見えない水面下では懸命に水を掻いている」というイメージから、「年齢」でなく「心中」に関する表現だと判断できる。したがって正解は選択肢1となる。

なお、「下の思ひ」が「表には出さない心中の辛い思い」を意味するのは、歌語としては古典常識の範疇に属する。これは「下行く水」といった形も多く、「小川のせせらぎの両岸から草が茂ってせせらぎは見えなくなってしまっているが、その下には依然として水の流れがある」ということから「表情には表わさないが、心中には辛く苦しい思いが流れてゆく」ということの譬喩として用いられる表現である。「心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる」などの歌でよく知られている。古語辞典で確認しておくことを勧める。

問2 傍線部は筆者ではない人物の表現を筆者が引用した部分であり、いわゆる融合問題の読解法を用いて、筆者による解釈・解説を探してあてはめて読むべき部分である。（前問でも、たまたま①は和歌の中で完結してしまったが、本来は③のように筆者による解釈・解説に依拠するのが作法というものだ。）

さて傍線部はやはり「鴨」の伝統的な詩的イメージを説明しようとするための引用であり、そのイメージは前問にも見たとおり「望郷・旅愁・不安・寒さ」であった。この点、全選択肢が「旅先」または「旅中」を言っているので、「旅愁」の点ではすべて妥当である。ところがその「旅愁」に関して「望郷」との関連を明示しているのは選択肢3「わが家・懐かしんで」に限られるので、この選択肢の妥当性が他より高いことになる。

問3 はじめに確認しておくが、設問文の中には「それぞれ」などの表現がない。ということは、「二箇所の空欄を埋めるのに別々に考えよ」と明確に指示されたわけではない。しかしまた、「二箇所は同じ言葉で埋められる」ということが明示されているわけでもないことに注意が必要だ。通常このような場合は解答欄を見ればどちらなのか判断できるが、いずれにせよ予断・先入主は禁物である。

さて、空欄を含む段落から関連の強い表現を拾ってゆくと、同段落1行目で「白し」を「『素秋』の『素』」とし、2行目で「無色透明の感」と言い換えている。これを承けて2～3行目で「……ことは……に徴しても知れる」としていることから、空欄1は「白」または「素」に関連する語で埋められるはずだ。空欄2に関しては、直後に「……もまた、『素風』『色なき風』の伝統を承け」としている点から「素」の関連語で埋められるはずであって、二箇所の空欄は同じ選択肢で埋めればよさそうだ。選択肢に「素」はないが「白」があるので、これを採ればよい。

問4 問題文に言う「『白し』の『し』」は《形容詞終止形の活用語尾》である。これを「いわゆる俳句用語」として考えよ、というのだから、俗に言う「や・かな・けり」などと同様の扱い方であることに注目して、「切れ字」が正解となる。「切れ字」というのは文法用語が貧弱だった時代から用いられている文芸用語だが、現代的に言うと《終助詞》・《助動詞終止形》・《形容詞終止形語尾》・《動詞命令形語尾》（および副詞「いかに」）などの総称と考えることができる。

なお、「俳句用語」に「いわゆる」がかぶせてあるのは、芭蕉の時代には「俳句」という言葉がまだなかったからである。現代の「俳句」は明治前期に正岡子規が提唱した新しいものだが、その基となった文芸形式は、芭蕉の活躍した元禄ごろから江戸時代を通じて正確に

は「俳諧連歌の発句」と言い、通常は略して「発句」あるいは「俳諧」と呼ばれていた。他に「いわゆる俳句用語」として近年の入試問題に出題実績のある俳諧・俳句の関連語を列挙しておく。これを機会に右のように正確に確認しておくとよい。

句中切れ・句切れなし・破調・字余り・俳諧連歌・発句・脇句・挙句・付け句・季語・季題・歳時記・蕉風・不易流行・天明調

問5 設問に言う「傍線④の根拠」は、「傍線部のように解釈できる根拠」の意味だと読み取るほかはない。そもそも問題文中の関連箇所としては、直前に引用された和歌の「鳴くなる」が最も直接的に対応している。「鳴く」は四段に活用するので、終止形・連体形が同形となって、下接する「なる」が《推定（または伝聞）》と《断定》とのどちらであるかは文脈からの判断を要求するが、「鳴く」が音響に関する動詞であることに鑑みて通常は《推定》（「～が聞こえる・～のようだ」）と解釈される。このことを指摘しているのが選択肢4であり、他の選択肢に瑕があればこれを採ることになる。

選択肢1・2は「作者」に言及しているが、問題となった和歌の作者に関しては問題文中では「湯原王」という固有名詞しか情報が与えられていない。問題文第三段落にはこの歌が一首まるごと掲載されているが、それだけで選択肢1・2のような判断の根拠とすることは困難である。また選択肢3は、たとえそういうことが和歌の世界にはあったとしても、問題文中にはやはり明示されておらず、そうである以上は受験生に要求できる知識の範囲を超えていると考えてよい。これらに対して先に見た選択肢4については、ごく一般的な文法事項の知識で妥当性が判断できるので、選択肢間における客観性の高さからこれを正解とすればよい。

問6 中世以前の文学者については複数の作品を手がけたことを憶えておくべき人物は少ないが、近世以降は逆に多い。とはいえ、芭蕉の作品は一般の受験生に暗記を求めるにはあまりにも多く、本問に見られるような「○○の作品でないものを選べ」といった設問が芭蕉の全作品の暗記を前提としていると考えるのは、受験勉強としては本末転倒だ。芭蕉クラスの「有名人」ともなれば「代表作くらいは知っておいてもらいたい」といった程度の出題意図に基づくものと判断してよい。芭蕉について具体的に言えば、『奥の細道』は当然の常識として、あとは『野ざらし紀行』・『笈の小文』・『更級紀行』・『幻住庵の記』・『嵯峨日記』と「俳諧七部集」（『冬の日』・『春の日』・『曠野』・『ひさご』・『猿蓑』・『炭俵』・『続猿蓑』）で十分だろう。

芭蕉関連について補足すれば、弟子たちの中でも際立つ人々を「蕉門十哲」と総称する。この中には代表作を知っておくべき人もいるので、『便覧』などで確認しておくとよい。また、芭蕉が理想とした先人に関する設問があれば、日本では「西行・宗祇」、中国では「李白・

杜甫」を考えるのが常識とされる。いずれも「漂泊の詩人」たちであることに気付けばよい。なかでも李白への傾倒は深かったようで、芭蕉の別の俳号に「桃青」というのがある。「桃」は「李（すもも）」に応じ、また「白」が「秋・西」の色であることから「春・東」を象徴する「青」を採ったものだろう。彼は他にも多くの俳号を持っていて、入試問題では問題文中に説明があるか註を施すかするのが普通だからあまり気にしなくてもよいが、晩年の「芭蕉」より「桃青」と名乗っていた期間のほうがむしろ長いので、この名は入試問題でも見受けられる。ついでに古典常識として「青・東・春・青龍」「赤・南・夏・朱雀」「白・西・秋・白虎」「黒・北・冬・玄武」「黄・中心・土用」の対応を思い出してみるのも面白いだろう。

《例題3》

出典…福沢諭吉『学問之独立』／一橋大学・09年

文章略解……学問も政治も、本来の目的は国家の幸福を増進させることにある。しかし、政治は国難を救うための方法であり、現実に即した臨機応変さが求められる。一方学問は、真理の探究を目的としており、時勢の変化に影響されてはならないものである。この点に立って考察すれば学問と政治は分離されなければならない。維新後十六年経過した現在、政府が学校を支配する体制をすみやかに改め、欧米文明国のように学問の独立を実現すべきである。

《解答》

問1 摂生法と治療法（養生法と治療法）

問2 攘夷論の全盛期に、洋学者が開国の必要性を説き続けて日本人を啓蒙し、日本を滅亡の危機から救ったこと。〔49字〕

問3 日本は、政府と民間それぞれの行うべきことが明確化した現在も、依然として学校が政府の影響下にあるから。〔50字〕

問4 学問は真理の探求を目的とし、時勢の影響を決して受けてはならないが、現実の変化に即応すべき政治の支配を受けると変質を余儀なくされるから。〔67字〕

――《解答》――

L3F／夏期／＊3